唐棣「桐陰読書図」巻について

福本雅一

作品自体ではなく、文献資料の面から見れば、宋元以後の画家中、最も多く言及されるのは、元の趙孟頫（子昂）と明の董其昌（玄宰）である。しかしそれにも拘らず、傑作した作品の伝存に乏しいのは、何故かこの両者である。その原因の究明はさておき、元明両朝の画壇の指導者であったこの二人を除いてその時代の絵画を論じることは勿論できないが、作品を欠いたまま、理論だけを云々してみたところで、あまり意味があるとも思えない。

私は以前、唐宋はさておき、元明において質的にすぐれ、作品自体も稀ではない二流作家を中心にした研究を優先させ、彼らの座標を確定した上で、それ以上であったに違いない大家の作品を鑑別してはどうか、と提案したことがある。中心を後にして、まず周辺を堅めるというのは、大家の真跡と伝承されている作品の中には、特にいかがわしいものが多く、中には児戯に類するような低級なものさえ含まれているからである。このことは、明初の王紱[1]について論じた際に述べた所であるが、今ここに採り上げる元末の唐棣も、従来の評価はやや劣るとしても、画史上に一定の位置を要求できる作家として、偶然に目睹したその「桐陰読書図」をめぐって若干の事実を追加し、彼の再評価を促したい。

一

唐棣、字は子華というのは、もちろん『詩経』召南・何彼穠矣に、「唐棣之華」とあるのを、そのまま名とし、また字としたものである。浙江呉興の人、呉興は現在の湖州、太湖の南岸に位置し、やや弓なりになるが、無錫と杭州の中間にある。この地は古来多くの画人を生み、呉の曹不興を始めとし、宋の燕文貴・文同、元の趙孟頫・銭選・王蒙、清の沈宗騫（芥舟）や、わが国にもなじみの深い沈銓（南蘋）・伊海（孚九）が輩出している。彼の生涯と画業については、穆益勤の[2]要を得た記述を借りておこう。

唐棣（一二九六―一三六四）

元代の画家、字は子華、晩年は遁斎と号し、浙江呉興の人。官僚の家に生まれ、幼より聡敏好学、詩文書画を善くして奇童と称された。早年に湖州郡守馬煦の属僚となり、彼の推薦で大都に召された。天暦・至順（一三二八―三一）年間、詔を奉じて嘉禧殿の山水屏風を

画いた。また集慶（南京）龍湖寺の壁画を絵くのに参加して、皇帝の賞識を得た。絵画を以って宮廷に侍奉し、集賢院に待詔した。彼は絵画で名を得たが、生涯官場から離れることができず、前後して嘉興路照磨・休寧県尹・江陰州教授等の地方官を歴任し、晩年は呉江州知州となった。在任中は政務と民事の紛糾をよく処理し、到る所で政績を収め、郷紳の間では頗る声望があった。山水に長を擅にし、趙孟頫に画を学び、李成・郭熙を師とした。古法の伝統をやや多く保ったが、変化もある。題材は多く農夫漁父等の労働者の活動情景を描き、生活の気分に富む。ある種の作品には林木窠石や峰巒の起伏を描き、高遠・深遠・平遠の山川の勝景を表現した。布局の細密厳謹に思い運らし、筆墨は豊潤、気勢は雄偉で、画法は工整細致を主とし、また多様な風貌を呈している。その代表作に「霜浦帰漁図」（台北故宮）があり、皴染細潤、筆法は堅勁で、山石の質感は非常に強く、やや多く郭熙の伝統を保留している。人物は刻画細致で、筆墨は更に秀潤であり、自己の創造を現わしている。「雪港捕魚図」（上海博物館）の画法もまた郭熙に淵源し、更に多く水墨の皴染を用い、筆墨は蒼勁簡潔で、ほぼ写意を帯び、またこれも一種の面貌である。「浮嵐暖翠図」は披麻皴と密集の円点で、峰巒の聳秀の勢を表現し、筆墨は淡清で含蓄があり、董源・巨然の遺風が多い、その他、伝世の佳作に「林陰聚飲図」「摩詰詩意図」「秋山行旅図」「山静日長図」等がある。

ここで唐棣の生卒を（一二九五―一三六四）としているのは、恐らく郭味蕖[3]に拠っているのであろうが、これについては翁と高両氏に共に異論があり、拙稿でも大きな問題として係っている。

二

この「桐陰読書図」紙巻は縦三三センチ、横四五〇センチ、三三×六五センチの同質紙を七枚合わせ、各紙の継ぎ目には「雪蕉館騎縫印」を鈐している。筆致、墨色共に破綻はなく、構図も水景に始まり水景に終り首尾一貫して、この間に不審はない。巻末に至り、「至正甲辰秋九月為仲権作桐陰読書図　呉興唐棣子華」と小篆で落款している（図版20―1～12）。

桐陰とは桐の木陰で、例えば顧況「題盧道士房詩」に「章を上りて塵世隔り、奕を看れば桐陰斜めなり」といい、于鵠「過張老園林詩」に、「薬気　深巷に聞き　桐陰　数家に到る」という。いずれにも大きな桐の葉に覆われた幽閑の境を歌い、読書にもふさわしい場所である。秦祖詠が清代絵画の評価を『桐陰論画』と名づけたのも、同じ気持からである。伝存の作品から見れば、その落款の多くは、年紀の後に「呉興唐棣子華」と行書で署するが、これは珍らしい小篆である。しかし同年の作「浮嵐暖翠図」も同じで、或いは最晩年の作には小篆を用いたのかも知れない。

この図巻には、絵に続いて次の四跋が並ぶ。

一、何思敬　七言古詩
二、来復　五言古詩
三、林邨居士　跋語
四、介春　七言古詩

三首の詩には後に詳しく触れる。一・二は元人、また三・四は清人である。いまこの図巻の成立の事情を語る一・二の附記について

検討してみよう。まず一には、

仲権は子華が画きし所の桐陰読書図を以って示さ見る、為に七古一篇を賦す、至正二十五年八月既望後三日、秘書丞何思敬并せて書す、

とあり、二にはただ

豫章の蒲菴来復　復た仲権高隠の為に題す、

と記されている。いま唐棣自身の落款を加える時、判明する事実は次のようになろう。

一、至正甲辰（一三六四）秋九月に、呉興の唐棣は仲権のために「桐陰読書図」を作った。

二、翌二十五年八月十九日、秘書丞の何思敬は、仲権からこの図を見せられ、彼のために四十句より成る七言古詩を作った。

三、豫章（江西南昌）の僧来復もまた、仲権のために十六句より成る五言古詩を作った。

ところで前述の如く、唐棣の卒年を諸書が甲辰と推測するのは、「浮嵐暖翠図」の紀年に依る。彼が当時すでに高齢であり、それ以後の作品が見られないからである。しかし翌年或いはそれ以後に書かれたこの図巻の詩や跋に、唐棣の死を匂わせる口吻は感じられない。これは一体どうしたことか。

唐棣の閲歴を最も詳しく述べるのは、張羽「子華唐君墓碣」[4]であるが、その主な部分は唐棣が休寧県尹であった時の政績を述べ、その他の行跡については甚だ簡略である。その生卒に関りある箇所を抽けば、

一、……其の余力もて絵画を習う、時に趙文敏公（孟頫）は君を一見し、輙ち之を奇とし、門下に出入せしむ、

二、……郡守馬侯徳昌に遇う……未だ幾ばくならずして秋官に擢んでられ、遂に挾みて与に倫比し、侯は君を捷径に致さんと欲し、仁宗に進薦す、詔して嘉禧殿の御屏を絵かしむ、揮灑して立に就り、天子称賞し、集賢院に待詔せしむ、

三、……嘉興路照磨に命ぜられ……徽州路休寧県尹に除せられ、……居ること五年、老を以って官を去る……奉議大夫平江路知州に進み、致仕して卒す、年六十有九、

四、……按ずるに虞文靖（集）の集に君の詩画を称し、並びに公が序する所の休寧稿と、黄文献（溍）公が述ぶる所の味外味集若干巻は家に蔵す、画若干軸は兵に廃す……詔して福建行省僉事を以って君を起すも、而も君は及ばす矣、

張羽は[5]呉中四傑に数えられる有名な詩人で、『静居集』の著がある。生卒は（一三三三―八五）、父の官游に従って江浙に移り、唐棣と同じ呉興に住んだ。「墓碣」を書いたのも同郷の縁である。両者は恐らく四十歳近くの隔りがあったと思われるが、面晤の機会はあったかも知れない。

この「墓碣」中には、唐棣の寿を六十九と記すにとどまり、生年卒年共に確定することができないが、同時代の他の証言を援用することによって、その範囲を絞りこんでみよう。翁同文[6]が「浮嵐暖翠図」の紀年を信じて、卒年をその歳、即ち甲辰（一三六四）に擬定したことはすでに述べた。これ後の数年であっても、別に差支えはないとも考えられるが、その時、障碍になるのは六十九という年齢である。

いま仮りに、唐棣の生卒を穆益勤が記したように（一二九六―一三六四）と暫定しよう。趙孟頫は至治二年（一三二二）に歿したから、

唐がその門に出入したのは、二十六歳以前ということになり、ここには問題はない。しかし次の馬徳昌はどうか。

徳昌は馬煦を字で呼ぶ。自から観復道人と号し、磁州滏陽の人。中書左司郎中より、済寧・湖州に出守し、至大三年（一三一〇）、刑部尚書を拝した。生卒は（一二四四―一三一六）で、『新元史』巻二〇三[7]に伝がある。「墓碣」に「遂に挾て与に倫比し云々」というのは、馬煦が唐棣を帯同して上京したことを指すが、続いて「仁宗は進薦す」というのが誤りなければ、上京の二年以後のこととなる。仁宗の治世は皇慶と延祐（一三一二―二〇）に及ぶが、この間、馬煦は延祐三年に歿しているから、結局「嘉禧殿の御屏を絵く」というのは、（一三一二―六）の五年間のこととなる。しかし上京した時はわずかに十五歳、宮中で彩管を揮うのは最終の年としても二十一歳である。翁同文[8]はこれに対して、

……天才児童は詩画皆な已に成熟すと雖も、終に稍や幼なるを嫌う、応に其の生年を将って前数年に移すべきに似たりと覚ゆ、

と述べた後、著録された画跡に就いて見れば、一三六一―四年の間にはみな作品が伝存するため、もし生年を五年前に移した場合、これらの作品はすべて偽作ということになる。

翁の議論を承けた高木森の意見[9]は更に過激である。彼は王逢『梧溪集』[10]中に、唐棣を花県と呼んでいることに注目し、この語を花甲（還暦）を逾えた老県令と解する。詩は「唐子華知州山水」と題する七言古詩で、首四句は次の如くである。

唐侯至正辛卯間
徘徊列宿郎官班
是時元綱方解紐
花県尚爾琴書閑

至正辛卯は十一年（一三五一）で、この時に還暦を過ぎているとするならば、彼の生年は至元二十八年（一二九一）以前となり、五年以上、その年齢を引き上げることが可能になる。この他にも高木森は二三の推測を試みた後、唐棣の卒年を甲午（一三五四）前後と考え、それ以後の年紀のある作品を、すべて偽画と断じている。もちろんここに論じる「桐陰読書図」もそういうことになる。

三

その後、陳高華の労作『元代画家資料』[11]が出版された。ここにはなお遺漏があるとしても、元代の著名な画家四十九名に関する文献資料を、同時代より明初に至る記録から摘出し網羅しようと試みたもので、唐棣ももちろん彼らの中の一人である。ここには彼に関する詩文の証言が三十八条引用されており、その中の黄溍「婺州路新城記」[12]には、次のようにいう。

……凡そ城の役は至正十二年（一三五二）春に起り、其の秋に訖る、壕の役は是の年の冬に起り、明年の夏に訖る……州県の其の役を分領する者は、蘭溪知州唐棣、

これによれば、彼は至正十二・三年には蘭溪知州であったことが分る。蘭溪は浙江の上游、金華の西北に隣接する。また趙汸「唐尹生塋記」[13]に、次の記事を見る。

……公の名は棣、字は子華、晩に遁斎と号す、官を去りて二年、奉議大夫平江路知呉江州を以って致仕す、今は年纔かに六十有五、

「墓碣」によれば、「奉議大夫平江路知州に進み、致仕して卒す、

年六十有九」とあるが、この二文を合わせると、唐棣は六十五歳以前に知呉江州に任じたことになる。平江は蘇州の称、呉江はその南隣である。黄溍（一二七七―一三五七）は浙江義烏の人、趙汸（一三一九―六九）は安徽休寧の人で、前者にはなお「唐子華詩集序」[14]があり、後者にも唐との交友を述べる二文がある。

通説に従って、唐棣の卒年を六十九歳とする以上、至正十三年（一三五三）に蘭渓知州であった者が、引続いて呉江知州を歴任し、致仕してなお六十五歳であったことが判明した後、高木森というように、唐棣は甲午（一三五四）前後に死んだとすることはできない。まして高が、壬寅と甲辰の年紀のある二画を偽作として一蹴することなど論外である。

唐棣の卒年はしばらく置き、この「桐陰読書図」に係わる元代の人々、即ちこの図を贈られた仲権と、跋詩を書いた何思敬・来復の閲歴について、次に検討してみよう。まず仲権であるが、この字で呼ばれる者を、元代には二人求めることができ、しかも共に元末明初の人で、唐棣と係わりあうことのできる世代である。

倪可与（一三二四―七六）は鄞（寧波）の人。礼文に深く、方国珍が礼法を尋ねたこともある。明の洪武九年に五十三歳で歿しているから、甲辰の年にはちょうど四十歳、唐棣との年齢差も約三十ある上、地縁関係も少ない。ただ烏斯道の「処士倪君仲権墓表」[15]に処士というが、それは任官せぬ者の称で、後に説く来復が、「仲権高隠」と述べるのとほぼ同じことである。高隠とは隠棲の高士のことで、処士を上品に呼んだにすぎない。

これに対し申屠衡は汴（開封）の人。長洲（蘇州）に移り住み、元末、張士誠の部将であった潘原明の客となった。生卒は明らかではないが、『列朝詩集』小伝[16]では、「楊維楨と遊び、其の博瞻を推さる」といい、洪武三年（一三七〇）には南京に召され、「喩蜀文」を草して旨に称い、翰林修撰を授けられたとある。

潘原明は『輟耕録』[17]に、「潘原明を左丞と為し、呉興に鎮せしむ」といい、また呉興の城池を修復し、民生を安んじた潘公の治績を讃えた「元左丞潘公政績碑石存」が、『両浙金石志』[18]と『呉興金石記』[19]に著録され、両書共に潘公を潘元明としている。呉興が朱元璋の猛攻に敗れたのは至正丙午（一三六六年・一三六六）秋のことで、それまでは潘原明はここを守り、従ってその客であった申屠衡もこの地にあった。唐棣も知呉江州を辞した後は、郷里呉興に帰臥していたはずで、丙午の二年前、即ち唐の歿年とされる甲辰には、この両者は呉興にいたと考えて、ほぼ誤りないとされよう。それ故、この「桐陰読書図」が贈られた仲権は、倪可与ではなくて申屠衡と考えることができる。

次に最初の跋に移ろう。何思敬は至正年間に秘書監丞となり、翰墨で有名、山水画を得意とした以外、詳[20]しいことは分らない。ただ戴良（一三一七―一三八三）の『九霊山房集』巻一六に、「題何監丞画山水歌」と「袁君庭玉以所蔵何思敬山水図求題賦長句」の二詩が見えるのみである。秘書監丞は宮中の図書を掌る官であるが、任官の時期を特定できなければ、殆んどここでは利用価値がない。ただ戴良は浙江浦江の人で、戦乱を避けて呉中に住んだが、張士誠の破滅直前、海に泛んで登萊（山東）に逃れたという。とすれば彼も恐らくこれら二詩を呉中で作ったものと思われる。従って何思敬も呉中にいたのである。

張士誠は万事に鷹揚で、厚く文人を保護したことは有名であり、

当時「死すとも泰州の張を怨まず」という言葉があったほどであるから、元末の学士文人はみなその庇護を求めて呉中に集って来た。文壇の盟主鉄厓楊維楨を初め、陳基・饒介・周伯琦・陶宗儀・朱徳潤等はみなそうであり、またこの地の出身である詩人の高啓・楊基・徐賁・袁凱、画家の倪瓚・王蒙等も加わって、呉中の文芸は元末に屹立していた。『明史』張士誠伝に、

……好んで賓客を招延し、贈遺する所の輿馬居室什器は甚だ備り、諸僑寓の貧しくして籍無き者、争って之に趨く、

というような活況を呈していた。顧瑛や倪瓚のような大富豪も競って客を招き、詩酒の応酬に明け暮れていたのである。何思敬もこの間に優游していた文士の一人であったに違いない。ここで先に引いた彼の跋を顧りみよう。そこには仲権のために七古を賦したのは、「至正二十五年八月既望後三日」と記されている。二十五年乙巳は、彼唐棣の卒年とされている甲辰の翌年に当る。しかもその死についても何ら触れられていない。四十句より成る詞句からも、それを暗示する言葉は見出せない。

次の来復[21]の跋に移ろう。彼はここに記されているように蒲菴と号し、豊城の人である。跋にいう豫章は江西南昌の古称で、豊城はその南隣の地である。俗姓は黄氏で字を見心といった。元末に慈渓の定水院に住持し、後に鄞の天寧寺に主持した。明に入ると、朱元璋の命で鳳陽の円通院に住し、洪武二十四年、胡惟庸の獄に連坐して殺された。年七十三とあるから、甲辰・乙巳の年には四十六・七歳ということになる。彼は能書であったと見え、『書史会要』[22]巻七にも、「釈来復、字は見心、番陽(はよう)の人、詩文を能くし、筆札を善くす」と記されている。交友も甚だ広く、当時の著名な詩人薩都剌・張翥・丁鶴年に、それぞれ彼へ贈った詩が残されている。就中、張翥とは特に懇篤であったらしく、彼の詩集『蛻菴集』には、この来復が序[23]を寄せている。それは丙午春に書かれたもので、末に「豫章沙門釈蒲菴来復序」と署した後、「沙門来復」と「見心」の二白文印を鈐している。この二印はこの「桐陰読書図」に用いられたものと全く同じである。このことは鈐印の吟味の時にまた論じよう。

来復が元末に鄞の天寧寺に住持したということは、一つの大きな可能性を復活させる。即ち仲権倪可与との関係である。彼が鄞の処士であることはすでに説いた。そして彼が例えば甲辰の年には四十歳で、来復とはわずか六歳の差しかない。儒生と沙門との相違はあっても、地方の都市では同じ読書人階級として、互いに面識があり交友があって当然である。もし呉下に流寓していた何思敬の原籍が浙東であり、或いはたまたま彼が天台や雁蕩の探勝に訪れていたとすれば、仲権は倪可与という想定も、簡単に成り立つ。しかしそのことを確定する決定的な証拠もない故に、今は先を急ごう。

四

何思敬と来復の二跋に続いては林邨居士と介春の両跋がある。これら四紙は紙質も墨色も印色もみな異っており、それぞれ別人によって時を前後して書かれたものであることが分る。林邨居士の跋にいう、

唐子華は休寧県丞為り、公餘の暇に、筆墨を以って自から娯しむ、性は貞介、惟だ山水と縁を為し、其の画を観るに、其の丰采を想見す可し、曾って東里秋香図巻を写し、予は金台貴遊の家に於い

て之を見る、又た一立軸の老圃秋容を写せるを見る、蓋し自から況うる也、乙丑春暮、予は秦中自り帰り、時に二三の朋好と、前賢の法書名画を評賞す、客に是の巻を持して售らんことを覓むる有り、展覧の間、頗る我が情を移し、恍として前に見る所の者の如し、真蹟為ること疑い無きを知る、況んや両元人の題識の拠る可しと為す有るを哉、既に購うを獲、復た数語を書し、以って歳月を誌す、林邨居士、

林邨居士は、文中に「有両元人題識」の語からすれば、明以後の、恐らくは林村と号した謝松州であろう。文の冒頭に「謝」の朱文一字印があるのがその証である。字は滄湄、長洲（蘇州）の布衣で、書画に巧みであった。また鑑識に長じ、世宗（雍正帝）に召されて内府の収蔵を鑑別したことがある。伝は『国朝耆献類徴』巻四八二。生卒は明らかではないが、文中の乙丑は恐らく乾隆十年（一七四五）であろう。この跋にいう彼が過眼した「東里秋香図巻」も「老圃秋容」図も、共に『歴代著録画目』に見えないということは、阿片戦争によるヨーロッパ列強の侵略や、太平天国による内乱以前は、なお民間に多くの名画が伝存していたことも想像させる。この「桐陰読書図」もその一例であるが。

最後に跋語がなく、ただ長篇の七言を録するのみであるが、署に介春氏書という。介春は黎庶昌（一八三七―九七）の字、純斎と号し、貴州遵義の人、廩貢生で官は川東道長に至った。両度日本大使に任じ、中国に佚亡した唐宋の旧籍を影鈔して『古逸叢書』を集成した。著に『拙尊園叢稿』がある。伝は『清史稿』巻四五二、『碑伝集補』巻一九。

以上で四跋の紹介を終り、次に鈐印の吟味を試みよう。いうまでもなく法書名画には多くの姓名印・私印・鑑蔵印が認められるものであるが、それらは書画を汚す場合を除き、作品の真偽や流伝の経路について、実にさまざまな事実を語り、或いは暗示するものとして、極めて重視すべきものである。巻首から上下の順で、それらを列挙する。正しい位置関係は図版によって確認されたい。

一　「真賞」朱文二字各方印
二　「文謙光印」白文回文方印
三　「夢坡居士」白文二行方印
四　「雪蕉館騎縫印」白文二行長方印（紙縫上六箇所）
五　「子華」白文長方印
六　「唐棣之印」白文二行方印
七　「希晋斎」朱文二行方印
八　「純斎過眼」朱文二行方印
九　「泌州私印」白文二行方印
十　「東呉文献衡山□家」朱文二行方印
十一　「仲権」朱文二行方印
十二　「夢坡居士」　三に同じ
十三　「秘書監丞」白文二行方印
十四　「何思敬印」白文二行方印
十五　「秘閣清風」朱文二行方印
十六　「文謙光印」　二に同じ
十七　「沙門来復」白文二行方印
十八　「見心」白文二行方印
十九　「泌州私印」　九に同じ

二十「東呉文献衡山□家」　十に同じ
二十一「仲権」　十一に同じ
二十二「謝」朱文方印
二十三「泌州私印」　九に同じ
二十四「虚室生白」白文二行方印
二十五「曽経滄海」朱文二行長方印
二十六「介春図書」朱文二行方印
二十七「耆英之印」白文二行方印

以上二十七印中、重複を除けば計二十二印。これらの中で図巻上に鈐されたものは一―十一。何思敬跋上のものは十六まで、来復跋上のそれは二十一まで、謝松州と黎庶昌に対するものは各三印、両者の時代は優に百年以上隔たるにも拘らず、何故か同一紙上に跋が記され、また印が鈐されている。

今これら二十二印について、知り得る限りの追求を試みる。

一は未詳。

二の文謙光は明末蘇州の人で、楷行を善くしたというが、詳しいことは分らない。「東呉文献衡山□家」という別印が後に見えるが、この印文からすれば、文徴明とは同族である。また『中国書画家印鑑款識』によれば、「文去盈」印が三方あり、恐らく字は去盈であろう。文寵光はその兄弟か。

三の夢坡居士は、『清人別名字号索引』では周慶雲とあるが、未詳。明代にこの号を見ない。

四の雪蕉館騎縫印は、前書には雪蕉の項に王相業・黄仲容・鄭竺の三名を挙げ、また『中国歴代書画篆刻家字号索引』では、明の弘治の間、浙江嘉興の胡昺と、清の雍正の挙人、浙江浦江の朱鶴鳴の二人を載せている。恐らくこれら五名中の一人と思われるが、他の資料が求められぬ限りは、同定が困難である。

五と六とはもちろん作者唐棣のもの。『晋唐以来書画家鑑蔵家款印譜』Ⅰには、「唐棣」「唐氏子華」「唐氏氏華」「書画斎」の四印を載せ、すべて朱文方印、ただ最後の一印だけは長方印である。『印鑑款識』ではただ「雪港捕魚図軸」に見える署名のみを採る。

七の希晋斎は未詳。

八の純斎過眼は黎庶昌。純斎はまた莼斎とも書く。

九の泌州私印は謝松州。松州を泌州と書くこともあったか。

十の八字印は文謙光のもの。東呉は蘇州、文献は『論語』八佾の語で、献は賢に同じ。古記録と賢人をいう。衡山は文氏の本貫、文徴明は自から衡山と号していた。共に先祖の家系を誇る句である。

十一の仲権については、すでに詳しく説いたが、倪と申屠のいずれとも、確定するに至らない。

十三の秘書監丞は何思敬の官職名。

十五の秘閣清風とあるのは、いわば宮内庁図書寮の清廉な雰囲気を自賛する語。

十七と十八については、すでに詳しく説いた。この両印の存在によって、この跋の真実が保証されるといえよう。

二十二の謝の一字印は、もちろん後の泌州と続くべきもの。姓と名の印を別にしたのである。

二十四の虚室生白は『荘子』人間世の語。無念無想で自ら真理に到達する比喩で、謝松州の遊印であろう。

二十五の曽経滄海の語は、琉球に渡ったことのある王文治の印語を借りた。黎庶昌もヨーロッパに遊び、日本へも赴任している。

二十六の介春は黎の字。図書はもちろん印章の意である。

二十七の耆英は清末の満人政治家（一七八七―一八五八）。阿片戦争敗北の媾和に際し、五港を開き香港を割譲する屈辱的条件を受諾した。両広総督・文淵閣大学士を歴任したが、英仏連合軍が天津に侵入すると、和議を放擲して帰京したため、自殺を命じられた。伝は『清史稿』巻七六・『清史列伝』巻四〇。

これらの鈐印からすれば、この「桐陰読書図」の流路は、およそ次の如く推測できる。即ち、

一　元末、仲権（倪可与・申屠衡）

二　明末、文謙光

三　清、雍乾期　謝松州

四　清、道光期　耆英

五　清、光緒期　黎庶昌

先述の如く、何思敬と来復は、仲権の依頼によって詩を作り跋を書いただけである。また騎縫印を鈐した雪蕉と夢坡居士と、二・四の文謙光と耆英の計四名は、単に過眼の証をのこしたにすぎないかも知れない。五の黎庶昌も単に詩を題しただけかも知れない。跋文によってその所有者であったことが確認できるのは、ただ直接に画を贈られた仲権と、購得を明記する謝松州のみである。

この巻は現在、広島の某家に伝わるが、祖父の中国書画の収蔵中の一巻で、伝来の由縁は今では全く分らぬという。短絡的に考えれば、明治十四年（一八八一）以後、前後およそ六年にわたって滞日した黎庶昌が、これを携えて来た、とすることができるが、この経過は、これ以上に探索不可能である。

五

最後に、これら跋中に歌われた三首の古詩の内容を解明し、それがこの「桐陰読書図」と、どのように係っているかを検証しよう。原詩は図版を見られたい。訓読のみを示し、併せて若干の語句の説明を加えておく。

茅屋の渓頭　紅樹の邨
石渠の秋水　清くして痕無し
枌榆　雨を過ぎて　鳥は澗に鳴き
桐葉　陰に垂れて　山は門に対す
老翁　日高く　睡りて初めて起き
相対して書を読む　牕戸の裏
干戈　此の如く　賦斂煩なるも
雞犬も晏然として　郷曲喜ぶ

山中　酒熟して黄花開き
仙人　我を候つ　芙蓉台
雲林　今夜　明月好し
幔亭の黄鶴に跨りて来らんと擬す

武夷山水　天下に無し
層々たる疊嶂　皆な画図
山川　直ちに疑う　渾沌の鑿せるかと
秦漢而下　霊仙の都
中天の積翠　宮殿開き
石壁の紅光　夜　電の如し

鸞鳳　常に驂し　神姥遊び
猨猱　共に酔う　曽孫の宴
洞中　別に昇真天有り
瓊林の遺蛻　枯蟬の如し
露盤の仙掌　千年の薬
春水　桃花　九曲の船
万松岡頭　羽衣の客
更に三山に入りて　真訣を採る
神游　計らず　海天の遙かなるを
夢覚めて長く懐う　海天の白きを
帰り来りて高く隠る　万年宮
天香　時に降す　双青童
道は参ず　元始鴻濛の外
身は寄す　虚空象緯の中
嗟　余れ久しく慕う　煙霞の侶
天は空山をして詩を作るに苦ま遣む
清歌　曽って遶る　幔亭の雲
凍筆　空く題す　草堂の雨
金丹　玉蟾に就いて分たんと儗すれば
木葉　西風　鉄笛聞こゆ
野老　只だ知る　堯舜の世
樵夫　或いは遇わん　武夷君

この何思敬の七言古詩は、四句換韻格。最初の八句はこの図巻に画かれている実景を述べる。七八句は、元末の戦乱で、税は頻煩に納めねばならないが、晏如として読書を娯しむ郷曲もあるという。

ところが九句以下は何故か一転して、天下の奇勝、武夷の山水を歌う。芙蓉台は仙人の住む芙蓉城。北宋の末、ここに遊んだという石曼卿・丁度・王子高のそれぞれに異なる話を伝え、特に王については、蘇軾が「芙蓉城詩」を作っている。幔亭は福建武夷山の一峰。渾沌の鑿は『荘子』応帝王の寓話。渾沌は天地未分の状態。神姥は恐らく天姥のこと。李白に「夢遊天姥吟」の雄篇があり、この詩も多くそれに学んでいる。遺蛻はぬけがら。この山中で羽化登仙することをいう。露盤仙掌は漢の武帝の故事。彼は長安の建章宮に銅の承露盤を作り、それに承けた露と玉屑を混ぜて飲み、仙人になろうと試みた。九曲は武夷山中の景勝。薩都剌「武夷館方池詩」に、「谿船明日　九曲に泛かび、紫翠に出入して潺湲を聴かん」とある。万松岡も実名。三山は伝説中の東海三神山。方丈・蓬萊・瀛洲。真訣は登仙の秘訣。以上三十句は、武夷山に遊び、更に三山に入って仙去しようとしたが果さず、夢さめていつまでもそのことを思うという。青童は仙人に仕える童子。元始鴻濛は原始の自然エネルギー。象緯は日月五星。煙霞侶は山林の隠士。金丹は不老不死の妙薬。玉蟾は玉で作った蟾蜍。水を入れる容器。また月の別名。武夷君は伝説中の武夷山中の仙人。

全篇やや難解な中にも、首八句と続く二十句とは、ほぼ理解できる。しかし末十二句は一体何を言おうとしているのか。そして何故突如として武夷山が出現するのか。

六

こうして想起されるのは、張羽「墓碣」の末尾である。そこには

「……詔して福建行省僉事を以って君を起こすも、而も君は及ばず」と記されているが、もしこれが唐棣の最晩年のこととすれば、甲辰（一三六四）或いはその前年の事実かも知れない。この時、元朝の威令は全く江南に行なわれていなかった、というわけでもなかった。張士誠は朱元璋と対抗する必要上、表面的には元朝の正朔を奉じ、毎年莫大な米穀を大都に送っていたからである。詔はその権力構造に支障のない限り、受け入れればよかったと思われる。僉事は按察使の属官ではあるが官階は正五品、従五品の知州よりはそれでも進んだので、妥当な任命といえよう。しかし「君は及ばず」とあるのはどうか。もしこの語を誤りとして、唐棣が実際に赴任したのだと考えてみよう。福建へは海路に拠らぬ場合は、すべて銭塘の上流から仙霞嶺を越えた。武夷はその西、江西との省境の南の崇安にある。彼は五年にわたって休寧県尹を勤めたが、その北にある黄山にも恐らく遊んだことはなかった。そのような痕跡が彼に関する記録に見られぬからである。また天下に甲たりと称された桂林山水もまた訪れたことがない。七十致仕を目前にした老画家にとって、柔媚な江南の景に飽いた山水画家にとって、武夷の探勝こそ、最後の旅の目的ではなかったのか。

唐棣が福建僉事に赴任したとすれば、それは何時のことであろうか。甲辰の前年癸卯（一三六三）は、モンゴルへの挑戦権を争う江南の群雄にとっては、実に運命の年となった。この時、蘇州の張士誠、南京の朱元璋、武昌の陳友諒は、互いに勢力拮抗していたが、東西の両雄に挟まれて最も不利な立場にあった朱元璋は、謀臣劉基の献策を納れ、まず西患を除くべく、全力を結集して、鄱陽における陳友諒との決戦に臨んだ。もちろん武昌からは挟撃を要請されたが、張士誠は猶豫して空しく好機を逸し、結局この優柔が三年後の破滅を招くことになった。

秋七月、激闘の末に陳友諒を敗った朱元璋は、九月には凱旋して論功行賞したが、その間、張士誠は元の江浙丞相タシチムールを脅迫して、呉王に封ぜられることを再三強要していたのである。元朝の黙殺に憤慨した張は、遂に自から王と称し、宮室を治めて官属を置き、大都への海運を停止してしまった。同じ九月のことである。

これらの事実より徴して、唐棣の任官は、九月前後と考えられる。後というのは、大都から蘇州へ、辞令の伝達に時間を要するからである。こうして少くとも九月までに福建に赴いたとすれば、同年の冬には着任し、福州への途次、武夷を訪れることも容易である。

ここで再び跋の詩に立ち戻ろう。何思敬の次には来復の五言古詩がある。

高林　頗る深邃
遠洲　亦た縈紆
風景　亦た何ぞ異ならん
中に隠者の廬有り
陽崖　落日明かに
陰磵　浮雲虚（むな）し
桐陰　茅屋を覆い
我が山中の書を読む
塵網の中に竭来して
機務　日に相い拘せらる
茲の膏肓（こうこう）の疾を念（おも）えば
彼の泉石図に媿ず

拙を抱きて　簪黻を謝し
素を養いて　耕魚を事とせん
俯仰すれば　天宇寛く
楽しむ所は恒に余り有り

前八句は、この「桐陰読書図」の景をそのままに描写して余す所がないが、後八句は、唐棣の長い官場の浮沈を憐れみ、この図に恥じぬ生活を楽しみと勧める。風景の句は東晋の新亭の会を意味し、何か指す所があるかも知れぬ。竭来は去来。塵網は世のしがらみ。機務は軍国の大事についていうが、ここでは単に職務。膏肓の疾は、五斗米のために官游を免れないこと。簪黻はかんざしと礼服。仕官をいう。養素は本来の性を保つ。嵇康「幽憤詩」に、「志は樸を守るに在り、素を養いて真を全うす」とある。

この二詩は、次の林邨居士のいう「両元人題識」に当り、共に筆力は沈著遒逸、墨色も凝重で、両者の紙質は異なるが、ほぼ元代に書かれたものとして間違いない。詩の内容も図巻の景と一致し、これらの二古詩が、この図のために作られことに対して、疑う理由は全くない。もし偽画とすれば、簡単な跋やせいぜい二三の絶句を、他から借りて加えておけばよいので、これほど入念な工作は必要ではなく、また恐らく不可能であろう。また万一、この「桐陰読書図」が偽画であるとしても、これら二詩が存在する以上、この図巻が存在したことは明らかで、幻の作品に対して、二首の長詩が作られることは考えられない。そしてその場合、落款を変えることもあり得ないはずとすれば、「至正甲辰秋九月、為仲権作桐陰読書図、呉興唐棣」という画巻は、確実に存在したのである。そして従って二跋の内容も真実であると保証できる。元代の錚々たる画家たち、例えば趙子昂や江南の四大家の偽作であればともかく、当時においても二流と目されている作家に対し、偽作者は投資に見合わぬ無駄な努力や、過度の粉飾は試みないものである。

続く林邨居士の跋には、先の紹介で事足りよう。最後の黎庶昌の詩は次のように歌う。

踏破す　北桟と南桟と
屐底の煙雲　緑は未だ散ぜず
游歴して到らず　閬中城
嘉陵の山水　只だ半ばを得
憶う我れは渡江　前日に来り
中流　到□　船頭に看る
闌干数折　丹梯を廻り
波瀧　微に斜めに　玉案を展ず
軒然として飛び出づ　雲中の屏
空を摩す翠影　銀漢に到る
古樹層々として　洞天を閟し
疎鐘処々に　瑤館を開く
日気　山煙　互いに呑吐し
十花　五色　燦爛を争う
喜ぶ　我れ今日　画図に入るを
身を騰せて直ちに上り　汗漫に遊ばん
交臂して英雄を失うが若き有らば
中夜　之を念いて　心は□乱す
此の意は知らず　誰か為に陳ぜん
失喜す　今朝　娯玩に侍するを

小舟飄泊して　江水を渡り
高きに登るも　肯て款段に騎らず
始め我れ　歩々　雲を踏んで入り
数転すれば　已に訝る　耳目の換るを
纔に峭壁従り　飛檻を通じ
陡に覚ゆ□窓　彼岸を呑むを
伊れ古の何人の大手筆
千山を掃破するのは　是れ藻翰
曲折せる篆は巴文字と就り
瀋りて江流と作りて　緑は断えず
江を隔てて遙に見る　十二楼
魚鱗の瓦屋　皆な貫を成す

介春氏書

北桟南桟は蜀の桟道の南北部分　南桟はまた石牛道とも呼ぶ。閬中は四川巴中の西、嘉陵江の北岸にあり、昔の巴国の都。嘉陵山水は呉道子の故事。彼は玄宗の命で嘉陵江水を画き、「臣に粉本無し、並びに記して心に在り」と称し、一日で大同殿に描きあげたこと。丹梯は赤いはしご。仙人を尋ねる道。軒然は高いさま。銀漢は銀河。洞天は神仙の居処。瑤館は仙境の玉館。汗漫は渺茫として際限のないこと。交臂失は『荘子』子方の語。誤って機会を失うこと。款段は駑馬。十二楼は『史記』封禅書に見える伝説中の神仙の居処。

この全三十二句の雄篇は、珍らしい仄韻翰の一韻到底格である。しかし詩の内容は、有名な蜀の嘉陵江の景を歌うと見え、前十六句はその描写であるが、後半十六句は、特に首句の「有若交臂失英雄」などは、何を指して英雄というのか全く解らない。第一、ここに歌われる事柄自体、この「桐陰読書図」と全く関りないのである。

ところで謝松州と黎庶昌の二跋は、朱罫のある紙を裏返して、連続して書かれている。謝跋の余白に黎が詩を題したといえばそれまでであるが、同時或いは同世代ならばともかく、ふつうこのようなことは殆んど見られない。その上、謝跋と黎詩は共に筆力繊弱で甚だ精彩を欠いている。殊に後者の書は、ただ形似を求めただけで、黎の作品に見られる飄逸峻抜の趣きは、全く欠けている。刻印も文字の布置が安定せず、草率の偽刻ではないかと疑われる。そして致命的な過失は、文字の誤写である。謝跋中の「二三明好」は朋好を見誤ったものであり、黎詩中の「翠影」なども摸し誤っている。更に第六句「中流到□船頭看」中の一字を脱している。そして先に述べた「有若交臂失英雄」句の唐突は、この前の数句を脱落したものではないかとも想像される。それでは何故、これらが附加されたのか。それはもともと具っていたからである。

七

結論を急ごう。私の推測は、この巻にはもと唐棣の二図が収められ、それが割裂されて、別々の図巻となったのではないか、というのである。例えば次のように、

唐棣山水図巻
A　桐陰読書図
B　山水奇勝図（仮題）
a　何思敬詩
b　蒲菴来復詩

c　明人跋
d　謝松州跋
e　黎庶昌詩

甲巻は　A・a・b・偽d・偽e、
乙巻は　B・偽b・c・d・e

甲と乙とは先後はどちらでもよい。甲巻即ち「桐陰読書図」巻は、いま巻頭は失なわれ、従って題簽もなく、図は隔水から始っている。これに対して乙巻は、題簽に恐らく、「唐棣山水図巻」と署され、神仙が棲むと思われる朱閣玉楼を点綴した、山水の奇勝が描かれていた。ここでは桐陰読書図と明記する何思敬の詩と跋は用いることができない。恐らく単なる叙景である来復の詩は偽書して利用したと思われる。cに明人の跋を想定するのは、或いは文謙光等の跋語が存在したのではないか、と疑うからである。

唐棣が最晩年に当って、武夷九曲の絶景を描いたかも知れぬ、と私が推測するのは、彼が福建行省僉事の辞令を受けたことと、何思敬の詩中に、武夷の奇勝が具悉して歌われているからである。その上、張雨の「墓碣」も元末喪乱の余の訛伝を信ずることがあったかも知れない。こう考えなければ、唐棣の伝記と作品と生卒の整合は得られないからである。つまり、張雨「墓碣」の記述によって、唐棣の生年を六十九歳と確定する。次に彼の作品が甲辰まで存在する、という二点から推せば、馬煦が彼を大都に伴ったということは、年齢的に早過ぎる。しかも推薦したのは時の天子武宗ではなく、次の仁宗の代になってからであるということから、少くともここに数年の空白はあったはずで、更に推せば、混乱と齟齬の原因は、「遂挾△与倫比」という句の挾の一字にあるのではないか。これは前文から続けると、馬煦が刑部商書に抜擢されて、大都へ帰任する時に連れていった、と解釈せざるを得なくなるが、これは唐棣の早熟な天才を誇張しようとする余りに筆が滑ったもので、実際は以下の文に見えるように、仁宗の治世に入ってから、馬煦が歿するまでの数年間に、唐棣は大都に赴いたのではないか。このように考えれば、彼の死も作品の現存する最後の年である甲辰に限らずとも、また少くとも一・二年は引き下げることができよう。ということは、唐棣の福建赴任と、そこからの帰還もまたあり得ることになる。

二図が存在したということは、何思敬の長詩の後半の描写と、黎庶昌の「桐陰読書図」の状景とは全く係りない七古の附加によってほぼ確実といえよう。ある画景に対して、類似の情況を歌う古人の詩を借りて題する、ということはしばしば見られる。しかしこの図巻のように、全く異なる状景を歌う二首の長詩が附加されるということは、殆んど考えられない。偽作であれば、何もこのような矛盾する要素を暴露し、しかも非常な手間のかかる工作を施す必要は全くないからである。

ところで山水の奇景を描写するこれら二詩も、内容は大きく異なる。何詩は武夷九曲を歌い、黎詩は嘉陵山水を歌うのは何故か。前者は唐棣の行跡を知悉して述べているのに対し、後者は恐らく山水の奇勝だけを見て作ったからではないか。この黎詩を或いは前人の詩を借りて写したものではないかと疑って、私は若干の詩句を吟味したが、そのことを証するに至らなかった。

いま以上のように二図の存在を想定すると、この甲巻、即ち「桐陰読書図」は、後の二跋を乙巻から借り、偽印を造ってこの二跋のみならず、前の両跋及び画巻中にも鈐した。後の二跋の詩文中の不

適当な部分を改変または省略した。例えば謝松州の文中には、「以誌歳月」と述べながら、その部分がない。もと「元明人跋」とあったのを「元人二跋」に改めた。黎庶昌の詩には、恐らく嘉陵江水を歌う所以が附記されていたに違いないが、甲巻の内容と予盾するために、ここに転写する際に省略してしまった。というのが私の推測である。

真偽の判断に最も必要な画自体については、すでに説く余裕がない。ただ唐棣の作品を年代順に通観した場合、初期の伝統的な構図と、やや硬直した用筆と単調な描法は、ここでは習熟の結果から生ずる一種のゆとりが感じられ、細密な描写も柔軟で軽妙な筆致に代っている。伝世の作品と、新たに発見されたこの図巻との、技法上の検討は次の機会に譲る。

由来、中国の古画には、実に多くの、実にさまざまな題跋や鑑蔵印が附され、それらが真跡の有力な保証となり、また流伝の径路を説き明かす役割を果してきた。しかしこのことを逆用して贋鼎を偽作することも、昔から殆んど日常的に行なわれてきた。ところが、中国においても日本においても、これらの附加物を徹底的に吟味することが等閑視され、ただ作品そのものを漫然と眺め、ただ専家の印象によって真偽を決定してきた、といってよい。それは真に危険なことである。この拙論はいわば真実に迫る手続きを示しただけで、明確な結論に達したわけではない。事がこれほど錯綜しておれば、他の推論も可能である。しかし作品が成立する過程を丹念に追跡し、流伝の径路を捕捉して、始めて真偽を云々することができると、私は信じている。幸いに中国は文献の国であり、時代が降るほどそれを利用することが容易となるが、歴史も知らず、漢詩文も解せず、篆字草書も読めぬ昨今の美術史家に、そのことができるのであろか。

〈注〉

1 拙稿「王紱の位置」(二玄社『断硯集』一九八五・一一)
2 穆益勤「唐棣」(『中国大百科全書』美術II、北京、一九九一・一)
3 郭味蕖『宋元明清書画家年表』(北京人民美術出版、一九五八・一一)
4 張羽「奉訓大夫平江路知州致仕子華唐君墓碣」(『呉興芸文補』巻三〇、未検、今、翁同文「画人生卒年攷」より引く)
5 張羽については拙稿「呉中四傑伝」張羽伝訳注(「帝塚山学院短大紀要」二七号、一九七九)参照。
6 翁同文「画人生卒年攷」唐棣(『故宮季刊」四巻三期、台北、)
7 またより詳しくは、虞集「戸部尚書馬公墓碑」(『道園学古録』巻一五)
8 注6に同じ。
9 高木森(「唐棣其人其画」(故宮季刊」八巻二期、)
10 王逢「唐子華知州山水「七古(『梧渓集』巻六)
11 陳高華『元代画家資料』(上海人民美術出版、一九八〇・五)
12 黄溍「婺州路新城記」(『金華黄先生文集』巻九)
13 趙汸「唐尹生塋記」(『佩玉斎類稿』巻二)
14 『金華黄先生文集』巻一八
15 烏斯道「処士倪君仲権墓表」(『春草斎集』巻一〇)
16 銭謙益『列朝詩集』甲集、申屠修撰衡小伝
17 陶宗儀『輟耕録』巻二九・紀隆平、なお潘原明は元明とも書かれて混用される。
18 阮元『両浙金石志』巻一八
19 陸心源『呉興金石記』巻一六
20 中華書局編『元人伝記資料索引』I参照。
21 同右IVは『大明一統志』巻四九以下、多くの文献を引く。
22 陶宗儀『書史会要』巻七
23 張翥『張蛻菴詩集』(常熟瞿氏鉄琴銅剣楼蔵明刊本)序